

豊澤雛文／咲くやこの花インタビューvol.1

豊澤雛文(とよざわ・ひなふみ)【平成 20 年度 演劇・舞踊部門[女義太夫] 受賞】



2016 年7月 15 日(金)に大阪倶楽部ホールにて、咲くやこの花コレクション『豊澤雛文 女義太夫を楽しむ会』を開催します。女義太夫・三味線の豊澤雛文さんは、平成 7 年度に参加団体「筍会(たかななかい)」として、平成 20 年度には個人として、二度の受賞歴を誇ります。義太夫だった祖父母の影響で高校卒業後に豊澤雛代(とよざわ・ひなよ)に入門。昭和 63 年の初舞台以来、芸歴 28 年を数えます。今公演では女義太夫の解説を交え、関東の現代人形劇団ひとみ座より「ひとみ座乙女文楽」との初共演が実現します。また、プライベートではご主人で文楽人形遣いの吉田勘市さんとの間に、中高生ふたりのお子さんを持つお母さん。取材当日も「PTA の会合に寄ってから来ました」と朗らかに笑う雛文さんに、本公演の見所などを伺いました。

◎取材・文・撮影＝石橋法子

「私みたいにごくフツーの子がおった方がいいかな、と(笑)」

雛文さんはご両親ともに一般人の家庭に育ちました。古典芸能の道に進まれたのは、義太夫節の師匠だったおじい様、おばあ様の影響が大きかったとか。おばあ様は関西女流義太夫の最長老で 96 歳まで現役を貫かれた竹本綾春さんです。最後となった 2013 年の公演では、雛文さんが三味線を務められました。

この世界へ入門したときもそうでしたが、一緒に舞台に立てたことを喜んでくれていました。同時に指導には厳しい人でした。身内には出来て欲しいという思もあり、もどかしかったんやろうなと思いましたけど、血筋とセンスは別物なので(笑)。あんまり怒られていると、見かねた雛代師匠が「まだ若くて入ったばかりやねんから」とよくかばってくれました。

それでも、晩年はやさしいおばあちゃんでした。



小さい頃はおじい様の稽古場でよく遊ばれたとか。子ども心に義太夫は、どのように映ったのでしょうか。

当時は義太夫をやりたいというよりは、おじいちゃんのところへ遊びに行く感覚でした。

おじいちゃんのやってることを子どもなりに高い声で真似すると、生徒さんたちから「上手ね」と言ってもらえるわけです。浄瑠璃の意味も分かんないと、やってて楽しかったのは覚えています(笑)。

雛文さんにとっては、日常の光景であり身近な存在だったのですね。

古典芸能という意識はなく、その後も祖父母がやっていることをただやってみたくて、自分からこの道に進みました。当初は私みたいなごくフツウの若い子がいた方がいいんやろなと思っていました。なぜかって？ 厳しい世界というイメージがあったので、こんな子でも(入門)できるんやと思ってもらえるかなと(笑)。最初はツボが似てるので半年ほど地唄を習って、自分でもカルチャー教室に三味線を習いに行きました。そこで聴いた、ポテン、ポテンという細棹や中棹の音色が合わなくて、自分には幼いころから聴いてきた太棹がやっぱり合うなと。祖父母に習った義太夫節も頭に入っていたので、今思うと幼いなりにもきっちり教えてもらっていたんだなと思いました。

女義太夫は明治の中頃に一大ブームとなり、夏目漱石や正岡子規、志賀直哉ら文豪たちも夢中にさせたとか。当時はどんな点が注目されていたのでしょうか？

今で言うアイドルのような存在で、物語のサワリになると客席から「どうする、どうする」と声を掛ける、追っかけ「堂摺(どうする)連」まで現れたり。若い男子学生さんたちが夢中になったそうです。雛代師匠も若いときは桃割りを結っていたそうなので、若い女性がきれいに語って汗を流す姿は、美しかったのかもしれない。ここぞのタイミングでかんざしを落として魅せる人もいたとか。



女性らしい艶と時代の熱気を感じさせるエピソードです。

文楽を含めてもの凄い人気で、舞台に出るのも競争やし、そこで役が付くなんてことはもっと凄いことやったと、祖父からも聞いたことがありました。雛代師匠の考えとしては文楽が基本なので、女義太夫では太夫も三味線も文楽の男性と同じようにやっています。太夫は女やからと節回しを変えると怒られる。私も太

棹の大きな三味線を女の手と力で弾くのは大変ですが、男性に負けないように音を出しています。その中で、女義太夫ならではのトーンや感じ方、伝わり方をいかに出せるかってことだと思います。

女義太夫や女性が一人で人形を遣う乙女文楽は、共に大阪発祥の芸能です。しかし近年は活気のある東京に比べ、地元関西では衰退傾向にあります。雛文さんが参加する女義太夫団体「筍会」もじつは開店休業状態だとか。

時代的には戦争を挟んでさまざまな娯楽が流行ったことが衰退した理由のひとつ。また関西は東京に比べて、結婚や出産を機に環境が変わる方が多かった。東京の人にも「関西は結婚しないといけないのかと思っていた」と言われたほど。筍会では特に語りの方にその傾向が強かったので、三味線だけで公演を打つのもなかなか厳しいのが現実で。今はそれぞれの一門や個別での活動が中心ですね。私も野澤錦糸師匠に付いて、義太夫三味線の講座を受け持っています。



そんな中、今公演ではブーム復活への期待もあるそうですね。

だんたん子育ても一段落してくるでしょうし、私も今後は集中してできるかなと楽しみです。入門から28年の間にいただいた芸があるので、望みを捨てずに残せたらいいなと。素人さんでも興味のある方にはどんどん楽器に触れて見て触ってもらうのが一番なので、機会があるたびに声掛けしています。今公演でもまずは女義太夫とは何かというところから、魅力を知ってもらえれば。

「子どもに『お母さん、メインやん！』って驚かれました(笑)」



今回の演目『御所桜堀川夜討 弁慶上使の段』は、義経に仕える弁慶が主人公。弁慶はあることで主人のために一肌脱ごうと画策するも、それにより自身の思わぬ過去があらわになります。先の読めない展開と弁慶の男気、さらに親子の愛と悲しみが交ぜになった聴き所の多い演目ですね。

そうですね。弁慶が思わぬ悲しみを背負う場面や、大泣きする人がいたり、昔の恋人に会って喜ぶ人がいたり、曲にも変化があっていい演目だと思います。

義太夫節の三味線は、単に音楽的な伴奏とは異なり、“心を弾く”ものだと言われます。お稽古ではどんな点に苦心されたのでしょうか。

若い頃は師匠によく「違う、内容を弾きなさい」と言われました。悲しい場面で悲しく聴こえない、盛り上げる場面で盛り上げてない、ただつらつらと弾いてるだけやったんでしょうね。楽譜にはここが節ですよ、ここは言葉ですよ、書かれているのは太夫の語りについてのみ。三味線の楽譜はあってないようなものなので、昔は兄弟子が稽古している横で聞いて、自分なりに書き留めたり。テキストがないので、その時々で時代と共に変化して伝わっている部分もあると思います。曲は語りのお阪弁に合わせて作られているとも聞きますが、実際に音色が語りと合わないで「その三味線、訛ってる」と言われることもありましたね。



三味線は感情を乗せやすい楽器だと感じますか。

重厚な太棹は迫力だけでなく、チンというひと撥で悲しみや寂しさも表現できる。幅があるんだと思います。内容を弾く面白さが分かりかけると、どう弾いたらどんな音色がでるのか色々試したくなる。この一音にどうやって思いを入れるか、今は深く掘り下げている感じです。

文字通り、音で語るイメージです。

師匠には、太夫は太夫、三味線は三味線で自分の世界を弾くことが大事だと教わりました。それぞれの世界がぱっと合わさったときに、ひとつの大きなものが生まれるんやと。一方で太夫さんの間や呼吸に合わせて、いかに上手いこと音をつないでいくかも重要で。声のいい人になれば凄く長く引っ張る人もいますし、逆に息の足りない人もいます。それも、日によって変わってくるでしょうし。そこは悩みました。今は少しは冷静に語りを聴いて、物語に入り込めるようになったかなと思います。

言葉と音色の生のセッションが、そのまま物語の熱量に反映される。ライブならではの境地ですね。

まだ分かってないですよ。ちょっとずつ分かることも増えてきているな、という程度で。人間国宝の四代目竹本越路師匠が(芸事を納めるのに)、一生では足りんと言ったくらいですから。雛代師匠が、私が半人前になるまで生きてられへんと言っていたのもよう分かります。雛代師匠は私が入門した当時で60歳を越えていましたが、「今あんたは大学生に教えてもらっている幼稚園児のようなもの。やれと言われてすぐできるものでもないけど、いつかは分かる日がくるから覚えておきなさい」と。それからいろんな方の話を聞いて、いろいろと気に留めてきたつもりなので、何となく「このことかな」と分かるときがありますね。



ところで、ご主人で文楽人形遣いの吉田勘市さんやお子さんたちと、文楽や三味線の話で盛り上がることはありますか？

まったくないです(笑)。主人のことは尊敬していますし、互いに踏み込める領域じゃないと思っています。ジャンルが違ってよかったなとも。もし同じ三味線で「その音違うで」とか言われたら、イラッとすると思うので。家庭に仕事を持ち込まないのが、家庭円満の秘訣です。子供が小さい頃は鑑賞に連れていくと「お父さん出てきた！」と声に出すので、それ以来見に行くことはないですね。ストーリーが分かり出してから、自分から観に行きたいとも言っているので、大人になってから行くようになるんじゃないでしょうか。私の舞台？ 子供たちは観たことがないと思います。だから、今回の公演チラシを見てビックリしました。「え？ これお母さんがメインなんちゃうん！ 友達に配ろうかな」って(笑)。



今公演は入門編としても、たくさんの方に楽しんで頂けそうですね。

若い子には早い時期から観たり、聴いたりして欲しい気持ちがありますね。素浄瑠璃は人形が出ない分、難しくも思われがちですが、一度人形を見てしまうとイメージが固定されてしまう部分もあると思います。そうではなく、自分で音色や語りを聞いて、どんな場所かな、どんな人物だろうと想像する楽しさを味わって欲しい。私も普段はフツーのお母さんですが、舞台ではガラリと変わった姿をお見せできると思います。



★大阪名物を訊く！【私の、咲くやこの花賞】

……私にとっての大阪名物は人ですね。大阪の人は面白くて優しく楽しい。今回太夫を務める姉弟子の竹本雛子は、堺の出身でほんまに関西のひと。話が面白いイコール、大阪人ですね。今回のトークでは？ お姉さんどうかな～。そこは、猫被ると思います(笑)。

MEMO:

【女義太夫】女性の太夫と三味線によって語られる浄瑠璃(三味線での語り物)。文楽のように演技者・人形を使わない形式を「素浄瑠璃」と呼ぶ。今で言う、ドラマや役者の心情に寄り添う効果音の付いた朗読劇と聞けば、イメージしやすいかも。明治期に隆盛し、大阪では竹本綾之助、豊竹呂昇というスターが生まれた。

【乙女文楽】大正末期から昭和初期にかけて大阪で考案された、女性ばかりで演じる人形浄瑠璃。文楽の「三人遣い」に対し、「ひとり遣い」で人形を操るのが特徴。その形式には＜胴金式＞と＜腕金式＞、2つの操法がある。全盛期にはそれぞれ「女文楽」「娘文楽」「乙女文楽」を名乗る3つの座が東西で公演していた。現在は総称して「乙女文楽」が使われる。また、＜胴金式＞の創始者・五世桐竹門造の直弟子、故・桐竹智恵子から40年以上指導を仰いできた、現代人形劇団ひとみ座の「ひとみ座乙女文楽」のみが現在唯一、正統な芸を受け継ぐ団体として、アジア、ヨーロッパ、アメリカなど国内外で活動している。

※参考資料／(財)現代人形劇センター「乙女文楽の魅力」2007年4月24日配布資料